

1 所在地 兵庫県城崎郡日高町国分寺

2 調査期間 一九八九年(平1)一月～二月

3 発掘機関
日高町教育委員会

4 調査担当者 加賀見省一

5 遺跡の種類 寺院跡

6 遺跡の年代 奈良～平安時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

但馬国分寺跡は、但馬国のほぼ中央部にあたる円山川中流域左岸の小扇状地上に位置する。標高は、塔跡西南隅の礎石上で二五・三

mを測る。

但馬国分寺跡の調査は、

(出 石)
一九七三年に始まり、今回で一六次を数える。その結果、主要伽藍では、金堂と中門を回廊で結び、金堂の西に塔を配置していたことが判明した。また、寺域についても、西限が未確認で

あるものの、東限、南限については確認でき、ほぼ寺域の規模を推定することができる。

今回の調査は、町道の拡幅工事に伴う事前調査として行ったもので、金堂の北東に道路の拡幅計画に合わせて2m幅のトレンチを三本設定した。このうち、一番北側のトレンチにおいて、横板組隅柱どめの井戸を検出した。井戸は四辺を方位に合わせて造られており、規模は、内法一辺一七〇cmの正方形で、検出面から底部まで二七〇cmを測り、底面には礫を敷く。井戸枠の材は、土台と四隅の柱にヒノキ材を用い、側板にはスギ材を用いている。

井戸内の遺物は、大きく上層・中層・下層に分れて出土した。下層からは、土器（墨書土器を含む）、瓦の他、釣瓶や鑪、斎串、木簡等が出土した。下層の遺物は、出土土器の形式や、紀年木簡から八世紀後半のものと考えられる。中層では、多量の瓦片と斎串、鞍・鐙・手綱・目・口を墨で描いた馬形、土器片が出土した。上層からは、井戸の検出面で、軒丸瓦と一〇世紀代の須恵器一点が出土した。これらのことから、この井戸が八世紀の後半までに寺域の伽藍に合せて造られ、九世紀から一〇世紀にかけての段階で廃棄され、埋められたものと思われる。

但馬国分寺跡では、今回の井戸を含め四箇所の井戸を検出しているが、今回のものは規模、構造的にも優れており、また金堂、講堂（推定）に隣接していること、墨書土器中に「大院」と記したものが

含まれること等から、国分寺内の重要な区画に付属した井戸であったと考えられる。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「造寺料収納帳」

・「宝亀三年四年
借用帳
(54)×26×5 061
(題籤軸)

(2) 供料六斗 『飛飛飛飛 司』合一石三斗八升五合 『飛』雜料七斗八升五合『飛』『月月月』

(408)×32×19 019

(3) □僧一人

(62)×(27)×3 081

(4) 光□

(50)×(15)×3 081

(5) ・「国南国」

・「□元」

422×61×4 011

(6) 「□人□四 朝□四^{〔来カ〕}人□□四人出石五養父五」

356×23×3 011

木簡の釈読にあたっては、奈良国立文化財研究所史料調査室の方の御教示を得た。

(加賀見省一)



第16次調査位置図